第１章 河川整備計画の目標に関する事項

第１節　流域及び河川の概要

１　流域の概要

(1) 流域の概要

神崎川下流ブロックは、神崎川が猪名川と合流する地点から左門殿川、中島川、西島川を分派して大阪湾に注ぐ約 7.1km 区間と、左門殿川、中島川、西島川の 3 河川を対象とします。神崎川の流域面積は、猪名川合流点下流において 591.1km² で、神崎川および中島川河口における流域面積は、これに、十八条および大野下水道排水区域が加わり 622.2km² です。

当該ブロックは、猪名川合流後の神崎川と、神崎川から分派する左門殿川、中島川、西島川の 4 河川で構成され、分派した左門殿川は中島川に合流し、中島川は大阪湾に注ぎ、西島川は出来島水門により神崎川から分派して淀川に合流します。また、西島川は西島水門(近畿地方整備局管理)により、淀川の洪水や高潮から防ぎょされています。

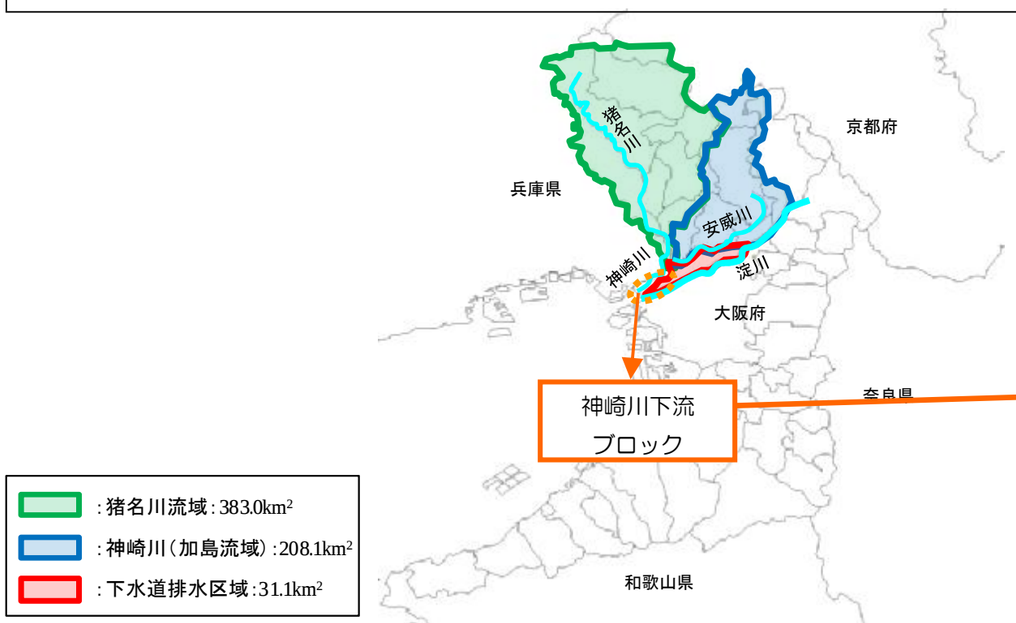

図 1.1　神崎川下流ブロック流域概要図

表 1.1　対象河川諸元

河川名	河川区間の始点・終点	延長（km）	備　　考
神崎川	起点）大阪湾 終点）猪名川との合流点 ※一級河川神崎川終点： 淀川からの分派点（摂津市一津屋）	7.10 ※18.59	神崎川下流ブロック延長 ※一級河川神崎川延長
中島川	起点）大阪湾 終点）神崎川からの分派点	2.82	
左門殿川	起点）中島川への合流点 終点）神崎川からの分派点	2.57	
西島川	起点）淀川への合流点 終点）神崎川からの分派点	1.49	

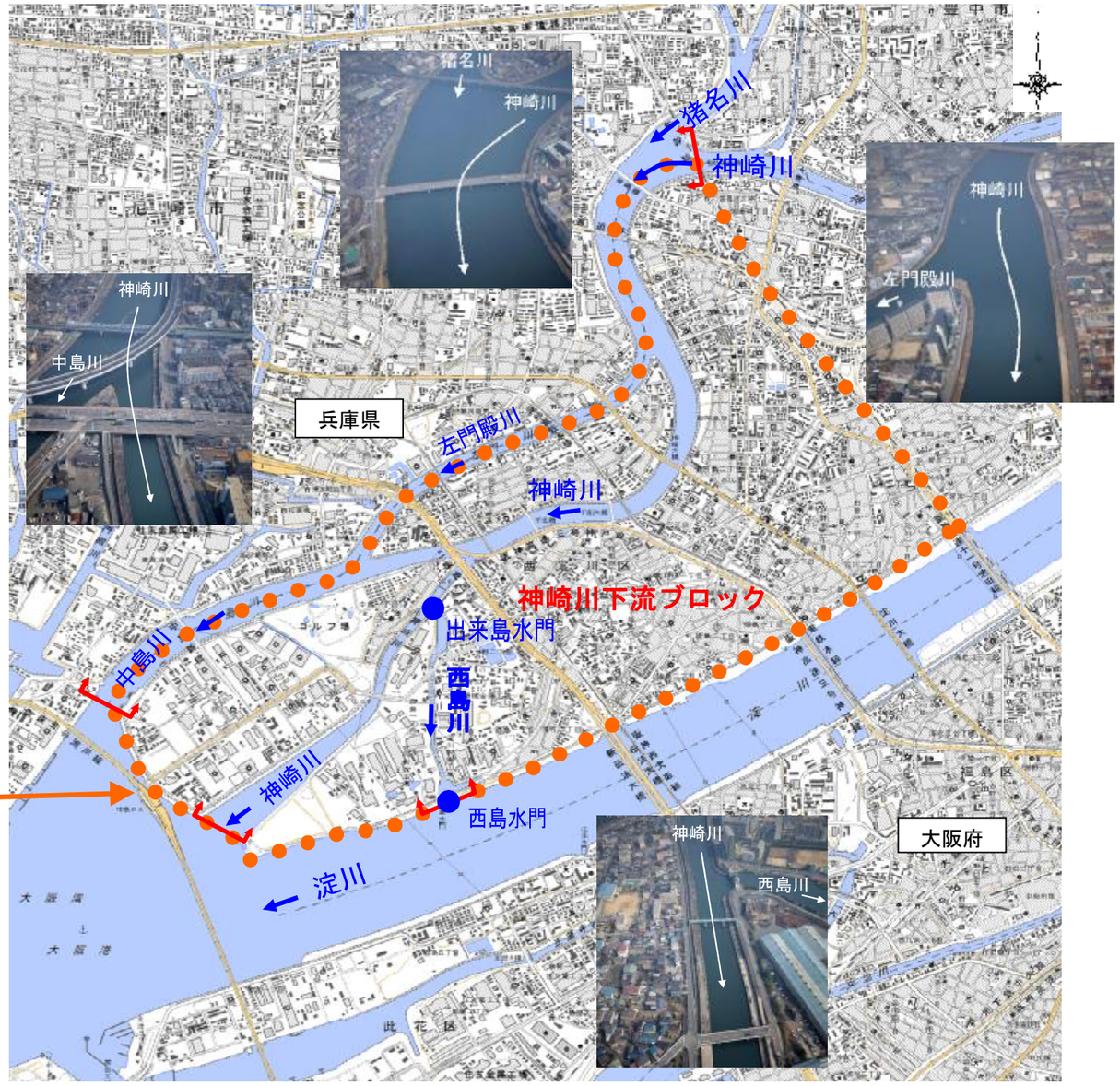

図 1.2　神崎川下流ブロック流域概要図

(2) 流域の変遷

当該ブロックに関連する自治体は、大阪市西淀川区の全域と淀川区の一部です。紀元前 2～3 世紀頃から河川等により運搬された土砂が堆積し、多数の島が形成され「難波(なにわ)の八十島(やそしま)」と呼ばれました。西暦 785 年に淀川と三国川(みくにかわ) (現神崎川)が開削され、舟の往来が多くなるとともに周辺地域が次第に開発されました。

江戸時代～明治初期には、水辺に近いことから、農・漁村として発展しました。明治・大正・昭和の初期にかけ、水運の発達や鉄道・道路などの急速な整備に伴い、紡績・機械・金属・鉄鋼・化学といった近代工業が発展し一大工業地帯を形成しました。しかし、これらの工業地帯は一方では大気汚染の発生源となり、当区に深刻な公害問題を生じさせましたが、いち早く発生源対策を行った結果、一定の成果をあげました。

平成になり、平成 9 年にＪＲ東西線が開通、平成 21 年に阪神なんば線が開通し、鉄道の利便性がさらに高まり、大阪のベッドタウンとしての役割も果たしています。

①古代～中世

古代には、上町台地の北側から生駒山地の麓まで海(河内湾)を形成していましたが、紀元前 2～3 世紀頃から河内湾・大阪湾に注ぐ河川が運ぶ土砂の堆積等により河内湾の陸化が始まり、上町台地の西に三角州や多数の島々を次第に形成し、辺り一帯は「難波(なにわ)の八十島(やそしま)」と呼ばれ、当該ブロックは、これらの島々を始まりとしています。現在、竹島(たけしま)・御幣島(みてじま)・歌島(うたじま)・佃(つくだ)(島)・出来島(できじま)・中島(なかじま)・西島(にしじま)など、「島」のつく地名が多いのはその名残です。西暦 785 年に淀川と三国川(みくにかわ)(現神崎川)との間が開削され、三国川河口の神崎から遡行(そこう)し淀川へ入る舟運が盛んとなり、その流路に沿う当地域も、次第に開けていくこととなりました。

②江戸～明治時代後半・・・・農・漁村としての発展

江戸時代、水運に恵まれた当地は、農・漁村として発展し、幕末までに多くの新田が形成されました。当時の新田開発は、埋立開拓により行われ、現西淀川区域を含む西成郡で盛んに進められました。

しかし、もともと大部分が低湿地帯である西成郡における新田開発は、淀川の度重なる洪水の被害に加え、その滞留水(悪水)の課題を抱えていました。そのため、延宝 6(1678)年に、西淀川区域を縦断し悪水を直接海に排水する中島大水道(なかじまだいすいどう)が建設されました。中島大水道は昭和初期まで利用されました。

③明治後半～昭和４０年代半ば・・・・工業地帯としての発展

西淀川区では、河川沿岸への工湯の進出や、阪神電鉄沿線で住宅の増加が見られたものの、明治の終わりごろまでは美しい田園地帯が広がり、江戸時代からの農業・漁業が主な産業となっていました。しかし、明治 20 年頃から紡績、食品、化学などの工場が次々と操業を開始し、日清戦争、日露戦争、第一次世界大戦による軍需産業の隆盛が追い風となり、大正・昭和のはじめにかけて急速に工業地域として成長し、農業・漁業は次第に衰退していきました。

阪神工業地帯の中核として工業が発展した当該ブロックにおいては、時代とともに工場集積が増加し、昭和 30・40 年代には、亜硫酸ガスによる大気汚染で、慢性気管支炎を患う人が多数にのぼり、公害問題が顕在化しました。西淀川区の公害は大気汚染に限ったものではなく、工場の過度の地下水くみ上げによる地盤沈下や、河川の水質汚濁等がありました。

④昭和４０年代半ば～現在・・・・公害からの再生

西淀川区は、昭和 44 年「公害に係る健康被害の救済に関する特別処置法」に基づく地域指定を受けましたが、同 46 年の公害認定患者が 2,000 人を超え、同 49 年 8 月に交付された「公害健康被害補償法施行令」第一号として指定を受けました。

大気汚染に対しては、昭和 37 年には「煤煙の排出の規制に関する法律」が制定され、同 40 年から大阪市で汚染状況の常時測定が開始されました。そして同 48 年に、「クリーンエリアプラン 73」が策定され、大阪市における大気汚染に対する本格的な取り組みが始まりました。

中島大水道、大野川は、戦後、農地の宅地化と工場の増加、台風水害による破損などにより、しだいに「どぶ川化」して悪臭を放ち、周辺の水環境を悪化させていましたが、大阪市により緑道として整備され、全国の住環境整備事業のモデルとなる大野川緑陰道路が昭和 54 年に完成しました。

昭和 40 年代以降の西淀川区は、工業の発展とそれによる公害に悩まされた人々の生活がクローズアップされてきた地区でした。しかし近年、公害に対する住民と行政の取り組みが蓄積され、一定の成果を上げました。

平成 9 年には、JR 東西線が開通し、平成 21 年に阪神なんば線が開通し、交通利便が飛躍的に向上しました。現在は、駅近傍の工場跡地にはマンションが建ち、工場の街から住宅の街へと変化しつつあり、大阪のベットタウンとしての役割も果たしています。

出典：西淀川区まちづくりレポート（平成 13 年 3 月）西淀川区役所（一部改編・加筆）

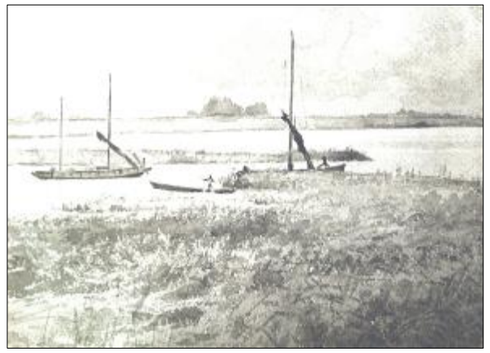

図 1.3　明治40年頃の河岸風景
出典：「西淀川今昔写真集」（西淀川区政 70 周年記念）
西淀川区制７０周年記念事業実行委員会

図 1.4　悪水路と化した大野川（昭和45年）
出典：「西淀川今昔写真集」（西淀川区政 70 周年記念）
西淀川区制７０周年記念事業実行委員会

図 1.5　大野川の埋立により整備された大野川緑陰道路
出典：西淀川区ホームページ